



Title	IT-cleft 対 WH-cleft : 語用論的研究
Author(s)	白谷, 敦彦
Citation	Osaka Literary Review. 1989, 28, p. 30-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25536
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

IT-cleft 対 *WH-cleft*

—語用論的研究—*

白谷 敦彦

0. 序

分裂文と呼ばれる *IT-cleft* と *WH-cleft* は、主に交換可能であるか否か、つまり、両者は同じものであるか、ということでこれまで議論されてきた。本稿では先学の理論を検討しつつ、語用論的立場から *IT-cleft* と *WH-cleft* の差異を考察する。第1節では、情報構造という観点から、分裂文の前提部・焦点部には旧情報・新情報がどのように現れるかを見ることにより両者を比較・分類する。¹⁾ 第2節では、談話における両者の機能の違いを検討する。

1. 情報構造からみた分裂文

分裂文は2つの節（前提部と焦点部）で情報を提示するため、旧情報・新情報が2つの節に様々な形で生じ得る。この観点から Prince (1978) は分裂文を(1)のように分類する。(NEW)は新情報、(OLD)は旧情報を表す。(2)(3)(4)はそれぞれの分類に属する分裂文の例である。

(1) a. Stressed Focus Clefts

It is (NEW) that (OLD).

What (OLD) is (NEW).

b. Informative-Presupposition Clefts

It is (OLD) that (NEW).

(2) (an example of Stressed Focus *IT-clefts*)

... So I learned to sew books. They're really good books.
It's just the covers that are rotten. (Prince 1978: 896)

(3) (an example of Stressed Focus WH-clefts)

There is no question what they are after. What the committee is after is somebody at the White House. They would like to get Haldeman or Colson, Ehrlichman. (Prince 1978: 887)

(4) (an example of Informative-Presupposition *IT*-clefts)

It was also during these centuries that a vast internal migration (mostly by the Galla) from the south northwards took place, a process no less momentous than the Amhara expansion southwards during the last part of the nineteenth century and the beginning of the twentieth century. (Prince 1978: 898)

Prince は *IT*-cleft に関しては、前提部に旧情報、焦点部に新情報がくるタイプと、前提部に新情報、焦点部に旧情報がくるタイプの 2 つを認めるが、WH-cleft は 1 つのタイプしかないとする。その論拠は「WH-cleft の談話使用条件」を (5) のように定めるからである。

(5) Discourse condition on WH-clefts: A WH-cleft will not occur coherently in a discourse if the material inside the (subject) WH-clause does not represent material which the co-operative speaker can assume to be appropriately in the hearer's consciousness at the time of hearing the utterance.

(Prince 1978: 888)

Prince は WH 節の情報を聽者が意識していると、話者が仮定できるときのみ WH-cleft は使用できるという。聽者が意識していると話者が仮定する情報は Prince の定義によると旧情報である。(6) が Prince の挙げている例である。##は談話のはじまりを表す。

- (6) a. ## What we're going to look at today (this term) is ...
- b. ## * What one of my colleagues said this morning was ...

(Prince 1978: 889)

(6) の 2 つの発話は、大学教授による学生へのことばであるが、(6-a)では WH 節の情報、つまり、「我々が今日何かを取り扱う」ということは学生の意識にあると話者である教授は仮定できる。ところが(6-b)では、「同僚が今朝何か言った」ということを学生が意識しているとは仮定できない。従って、(6-b)は容認不可になる。さらに進めて Prince は、次のように言う。WH 節が聴者の意識に実在する情報を提示するとき、つまり、WH 節の情報を聴者が意識していると話者が 知っているときには WH-cleft は使用不可能である。(7) がその例である。

以上が Prince の議論であるが、以下検討してゆく。²⁾ まず「WH-cleft の談話使用条件」についてだが、これについては次の例が反例となる。

- (8) ## What I have often asked myself is how other linguists manage to keep abreast with the rapid developments in the different fields of linguistics while still finding time to go on writing articles themselves. One colleague who has proved to be able to do this and who I have the honour to introduce to you tonight is Mr. (Declerck 1984 : 257)

(9) ## Blonds, schmlonds. What is really intriguing to Brazil's Iauálapiti Indians is the concept of the Nautilized pec. When Sting took time off from his recent South American tour to visit the people who live near the Xingu River,
(underline mine. 'Going Native — For a Cause,' Newsweek, March 28, 1988. p. 29)

(8)において WH-cleft は談話の始まりに用いられており、WH 節の内容

が聴者の意識にあるとは仮定できない。(9)においても聴者がWH節の情報を意識することは完全に不可能であるし、そう仮定することも完全に不可能である。これらの例から、話者は聴者の意識を全く考慮せずWH-cleftを用いて発話できるということが言える。従って、WH-cleftの前提部(WH節)に新情報も来得るということになる。次に(7)の例について検討する。Princeは(7)の例においてはWH節に聴者が意識していると話者が知っている情報が来ているというが、そうではない。

- (10) A: Wasn't that incredible when Mary called the boss a pig?

B: *Yeah, what really shocked me was that she called him
that. ↑
①

Bの発話において①の時点ではWH節の内容が先行談話と同一の内容であるとは認定できない。②の時点で、はじめてそう認定できるのである。焦点部を(11)のように改めると容認可能な談話となることからそれが証明される。

- (11) A: Wasn't that incredible when Mary called the boss a pig?

B: Yeah, what really shocked me was her attitude in calling
him that.

このことから、WH-cleftが用いられると、その焦点部において聴者の意識している情報、つまり、旧情報が来ることが許されないと見える。以上のことにより、Princeの分類以外に、前提部に新情報が来、焦点部にも新情報が来るWH-cleftsの存在があることになる。(8)と(9)がその例となる。以上、WH-cleftについては情報提示のあり方が明らかになった。

次にIT-cleftについてみてみる。(12)の例を参照されたい。

- (12) ##It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us
the weekend. On September 25, 1926, in a somewhat shocking

move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.

(Prince 1978: 898)

この例において *IT-cleft* は談話の始まりに用いられており、その焦点部も前提部も聴者が意識することは不可能である。従って、この例は焦点部・前提部共に新情報の来る *IT-cleft* の例となる。

以上のことから情報構造という観点からの分裂文の分類は次のように修正される。

(13) a. Stressed Focus Clefts

It is (NEW) that (OLD).

What (OLD) is (NEW).

b. Informative-Presupposition Clefts

It is (OLD) that (NEW).

c. Stressed Focus and Informative-Presupposition Clefts

It is (NEW) that (NEW).

What (NEW) is (NEW).

このことから言えることは、*IT-cleft* には情報構造上の制限は全くないが、*WH-cleft* の焦点部には必ず新情報が来る、ということである。従って、情報構造から見ると 2 つの分裂文の間には決定的な差異があることがわかる。

2. 談話における分裂文

談話は旧情報から新情報へと進むという基本的な原則があるため、第 1 節で分類した分裂文のうち旧情報を含むものについては *IT-cleft* と *WH-cleft* とで厳正なる比較はできない。従って本節では、前提部と焦点部に新情報をもつ *IT-cleft* と *WH-cleft*、論理的には交換可能な両者について、談話における使われ方の違いについて考察する。これについては Declerck

(1984) の論考がある。まず、これを概観する。

Declerckはどちらの分裂文が選ばれるのかを決定するのは談話のtheme continuity という原理であるとする。³⁾ Theme continuity とは次のようなことを意味する概念である。談話には句・文レベルのテーマと談話レベルでのテーマがある。⁴⁾ 句どうしがテーマをもって聴者が知覚処理しやすいように進んで行き、その結果、談話レベルでテーマが一貫性をもつ。従って、情報がなめらかに流れるような、また、テーマが一貫性をもつような表現が選ばれる、ということである。Theme continuity の原理には2つの重要な点があることになる。1つは「なめらかな情報の流れ」ということであり、もう1つは「テーマの一貫性」ということである。(14) の例において、Declerck は (14-a) の方が自然であるという。

- (14) a. Have you found everything you need? —Well, I've found the handbooks that I need, but what I haven't found is the dictionary.
- b. Have you found everything you need? —Well, I've found the handbooks that I need, but it's the dictionary that I haven't found.

(Declerck 1984: 275)

分裂文の前には「見つけたか」という先行談話があるので「見つけたもの」である handbooks を示した後、WH 節で「見つけていないもの」というテーマをもってくる WH-cleft [(14-a)] の方が情報がなめらかに流れるし、テーマも一貫性をもつ。ここで、WH-cleft は2つの条件、つまり、①情報の流れのなめらかさ、②テーマの一貫性、という条件を満たす。

以上が Declerck の議論であるが、Declerck の言う theme continuity は分裂文の談話における使い分けを説明するのには不十分である。テーマの一貫性という論点には即するが、「情報のなめらかな流れ」という論点にはそぐわない例が見られるのである。

- (15) Then the date came and the play went on and on and I didn't

kill myself. It wasn't cowardice : it was a memory that stopped me – the memory of the look of disappointment on Sarah's face when I came into the room after the V1 had fallen.

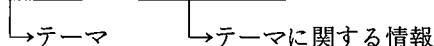
(underline mine. Graham Greene, *The End of the Affair*. p. 75)

(15) の IT-cleft を WH-cleft に改めたものを (16) として示す。

(16) ... I didn't kill myself. What stopped me was not cowardice, but a memory – the memory of the look of disappointment on Sarah's face ...

先行談話に「自殺しなかった」とあるので、前提部で「それを思い止どまらせたもの」という情報を提示する WH-cleft の方が情報はなめらかに流れる。しかし、実際に使われているのは IT-cleft である。ここでもう一度テーマについて考えてみたい。

(17) It was a memory that stopped me.



(18) What stopped me was a memory.



IT-cleft のテーマは *a memory* で、WH-cleft のテーマは *what stopped me* である。*a memory* と *what stopped me* は同一のものを表すが、異なるのは 2 つの分裂文の情報提示の仕上である。WH-cleft では、*what stopped me* というように WH 節によりテーマが示され、stopさせたものの存在、つまり、*the thing that stopped me* の存在が提示される。そしてそのあと、焦点部でそれが *a memory* であると同一視される。従って、情報提示は聴者が知覚しやすいようになされ、情報はなめらかに流れる。これに対し、IT-cleft でははじめからいきなり *a memory* が提示され、*that* 節からがそれに関する情報となる。また、IT-cleft ではテーマを提示する部分が焦点部と一致する。これらのことから IT-cleft は、談話のなめらかな流れをこ

わすが、テーマづけとしての情報提示能力が WH-cleft よりも強力であるということができる。加えて、新情報がいきなり焦点をあてられて提示されることからくる意外性、そして、一瞬談話の流れがとまったかのように思われるサスペンス効果もその能力に力を添えている。(15) の分裂文のあとでの談話では *memory* がテーマとなっているので、この分裂文においては、*memory* をテーマとして提示するためにテーマづけの力の強い IT-cleft が選ばれたのであろう。これまでの研究では先行談話は考慮に入れられても後続談話は考慮されることがなかった。談話を考える際には前も後ろも視角に入れる必要があるのであり、そうしないと本当の意味で談話における機能を考察したことにはならないのである。

(19) も小説から取った例であるが、同じことが言える。

- (19) ... he [Tom] wouldn't have minded being punished himself if he deserved it, but then, he never *did* deserve it.

It was Tom's step, then, that Maggie heard on the stairs, when her need of love had triumphed over her pride, and she was going down with her swollen eyes and dishevelled hair to beg for pity. At least, her father would stroke her head and say, 'Never mind, my wrench.' It is a wonderful subduer, this need of love, this hunger of the heart: as peremptory as that other hunger by which Nature forces us to submit to the yoke, and change the face of the world.

But she knew Tom's step and her heart began to beat violently with the sudden shock of hope. He only stood still at the top of the stairs and said, 'Maggie, you're to come down.'

(underlines and parenthesized word mine. George Eliot,
The Mill on the Floss. p. 91)

ここでも IT-cleft が使われているが、談話をなめらかに進ませるのはやはり、WH-cleft の方で、What Maggie heard on the stairs then was Tom's step. とした方が聴者は知覚しやすい。父の言葉に一瞬気をそらすマギー

だが、マギーは *Tom's step* に注意を向けていることが一貫して示されている。ここでもなめらかな情報の流れを破ってまでテーマを提示するということに話者（作者）の意図がみられ、結果的に *IT-cleft* が用いられている。もう 1 例 *Newsweek* からの記事の例を挙げておく。

- (20) At 7:30 p.m. on Thursday, about 2,000 shouting students swarmed around the U.S. Embassy complex. Breaching the security barrier of a seven-story annex, they destroyed equipment and files, ... "They [guards] did not come through with the responsibility a host government has for an embassy," said one frustrated State Department official.

It was the arrest of a notorious alleged drug trafficker that triggered the attack. Two days before — and by arrangement with U.S. officials — Honduran military officers seized reputed cocaine kingpin Juan Ramón Matta Ballesteros, ...

(underline and parenthesized word mine. 'A Spasm of Anti-Americanism,' *Newsweek*. April 18, 1988. p. 22)

IT-cleft の前には学生のアメリカ大使館に対する暴動についての情報がある。そして *IT-cleft* によって「暴動の引き金になったのは麻薬売買人の逮捕だった」と語られ、その次には *IT-cleft* のテーマである「麻薬売買人の逮捕」についての情報が続いている。ここでもなめらかな情報の流れを破ってまでテーマが優先されている。

以上のことから、Declerck の言う theme continuity の 2 つの要素は分けてそれぞれ 2 つの分裂文にあてなければならないことになる。つまり、談話のなめらかな流れが優先される時には *WH-cleft* が用いられ、テーマが優先される時には *IT-cleft* が用いられるのである。⁵⁾

以上のことから、談話においても *IT-cleft* と *WH-cleft* とでは機能に差異があるといえる。

3. 結論

以上のことから次のように結論づけられよう。

WH-cleft の前提部には必ず旧情報が来るというのは誤りで、新情報も来得る。しかし、焦点部には必ず新情報が来、情報構造上の制限の無い *IT-cleft* とはその点で異なる。

また、前提部・焦点部共に新情報を持つ *IT-cleft*, *WH-cleft* が存在する。両者は一見、交換可能であるが談話においては、*WH-cleft* はなめらかな情報の流れを、*IT-cleft* はテーマづけを優先するように機能する。

注

*本稿は1988年5月21日の日本英文学会第60回全国大会において口頭発表した原稿に加筆・修正を施したものである。本稿を作成するにあたり手厚い御指導を戴いた河上誓作先生に深く感謝致します。

1) 分裂文の前提部、焦点部は図示すると次のようになる。

It	<u>焦 点 部</u>	<u>that</u>	<u>前 提 部</u>
What	<u>前 提 部</u>	is	<u>焦 点 部</u>

また、情報に関する考察は Prince (1981) が詳しいが、本稿ではこれを基本に旧情報・新情報の定義を次のように定める。旧情報は、聴者が意識していると話者が仮定する情報と、聴者が推定できると話者が仮定する情報であり、新情報は聴者が知らないと話者が仮定する情報と、聴者が知ってはいるが意識していないと話者が仮定する情報である。

2) 情報の新旧からみた分裂文の分類は Prince 以降、Brömser (1984), Declerck (1984) が行っているが、両者とも Prince の提示した「談話使用条件」の否定に至っていない点で論拠に欠ける。

3) Declerckは談話においてどちらの分裂文が選ばれるか決める要因は theme continuity が主要因であるとしながらもマイナーな要因として、あと2つ上げている。それは、短い語句は文頭に長い語句は文尾に置かれる傾向があるので、それに従って分裂文の使い分けがなされるということと、*WH-cleft* よりも *IT-cleft* の方が強調するのに適しているということである。

4) テーマに関する概念は Declerck と同じくする。テーマは情報の新旧とは関係無く、また、文の最初の要素である。

5) 旧情報を含む分裂文の厳正なる比較はできないとしたが、第2節で論じたことはそれらにもほぼあてはまると言えよう。前提部に旧情報をもつ分裂文について考えてみると、WH-cleftは文の始め（前提部）に旧情報、終わり（焦点部）に新情報が来ており、談話の「旧情報から新情報から新情報へと情報を進ませる」という原則を守っているが、IT-cleftは文の始め（焦点部）に新情報、終わり（前提部）に旧情報が来ており、談話の原則を破っている。原則を破ってまで焦点部の情報、つまり、テーマが優先されているからである。

参考文献

- Bolinger, D. (1972), "A Look at Equations and Cleft Sentences," in E. S. Firchow et al. (eds.), *Studies for Einar Haugen*. The Hague : Mouton. 96-114.
- _____. (1977), *Meaning and Form*. London : Longman.
- Brömsler, B. (1984), "Towards a Functional Description of Cleft Constructions," *Lingua* 64. 325-48.
- Chafe, W. (1974), "Language and Consciousness," *Language* 50. 111-33.
- _____. (1976), "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Points of View." in C. N. Li (ed.), *Subject and Topic*. Academic Press. 25-56.
- Declerck, R. (1983a), "It is Mr. Y' or 'He is Mr. Y.'," *Lingua* 59. 209-46.
- _____. (1983b), "Predicational Clefts," *Lingua* 61. 9-45.
- _____. (1984), "The Pragmatics of It-clefts and Wh-clefts," *Lingua* 64. 251-89.
- Firbas, J. (1964), "On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis," in *Travaux Linguistiques de Prague*. 1. 267-80.
- 福地 肇 (1985), 『談話の構造』大修館書店。
- Halliday, M. A. K. (1967), "Notes on Transitivity and Theme in English." Part 2. *Journal of Linguistics* 3. 199-244.
- Jones, B. & L. K. Jones. (1985), "Discourse Functions of Five English sentence types," *Journal of the International Linguistic Association* 36. 1-21.
- 大江三郎 (1984), 『英文構造の分析—コミュニケーションの立場から—』弓書房。
- Prince, E. F. (1978), "A Comparison of WH-clefts and IT-clefts in Discourse," *Language* 54. 883-906.

-
- _____. (1981), "Toward a Taxonomy of Given-New Information,"
in P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. Academic Press.
- 山田仁子 (1985), 「談話における WH-cleft」 *Cairn* (九州大学大学院 英語
学・英文学研究会) No. 28. 269-86.
- 安井 稔 (1978), 『新しい聞き手の文法』 大修館書店。

引 用 文 献

- Eliot, G. (1860), *The Mill on the Floss*. Penguin Books.
Greene, G. (1951), *The End of the Affair*. Penguin Books.